

〈研究ノート〉

パスカルにおける恩寵論*

—展開と傾向—

森 川 甫**

恩寵と自由意志の問題は、教父たち、公会議において初代教会から論じられてきたキリスト教神学の大問題であり、これとパスカルとの関係は、ジャン・ラポルト、ジャン・メナール、フィリップ・セリエ、ジャン・ミールらによる研究¹⁾によって解明されてきたが、本書では、『プロヴァンシアルの手紙』論争においてこの問題に関するパスカルの思想がどのように展開、発展したかを明らかにし、次いで、彼の思想の傾向について論じていきたい。まず、恩寵論の展開を『プロヴァンシアルの手紙』「第1の手紙」～「第3の手紙」と「第17の手紙」「第18の手紙」において論じ、次いで、『恩寵文書』²⁾において考察する。『プロヴァンシアルの手紙』だけでなく、『恩寵文書』をも論じる対象にしているのは、この文書が『プロヴァンシアルの手紙』執筆の少し前から書かれ、パスカルの著作のなかで、この問題を最もよく論じているからである。

第1節 恩寵論の展開

1) 『プロヴァンシアルの手紙』「第1の手紙」～「第3の手紙」、「第17の手紙」「第18の手紙」

(1) 「第1の手紙」

「第1の手紙」は事実問題と法問題をとりあげ

ている。事実問題というのは、アルノーの言葉、つまり、「自分はジャンセニストのくだんの著書を詳しく読んだ。しかし、そこには故教皇が異端として宣言された命題は見当たらなかった。とはいえ、自分は場所の如何を問わず、これらの命題を非難するがゆえ、ジャンセニウスのうちにあれば、やはり非難するものである」³⁾という言葉が不遜な態度かという点にある。法問題というのは、「すべて義人は常に律法をまもる能力を有する」という点に関して、ジェズイットはドミニカンと組んで、アルノーを非難している。ドミニカンは彼らのトマスの教義がモリニズムよりもジャンセニズムに近いにもかかわらず、アルノーに敵して、ジェズイットに味方した。ジェズイットとドミニカンは、「常に律法をまもる能力」を「近接能力」という言葉で呼び、一旦、この「近接能力」が認められると、モリニストにとっては、行為は人間の自由意志次第となるが、逆に、ドミニカンにとっては、さらに神からの恩寵が必要となる。実際には、ドミニカンの主張はアルノーの主張と同様である。ジェズイットとドミニカンは両者の根本的な不一致を「近接能力」という語で覆い隠し、政略的に一致しているにすぎないとパスカルは指摘している。

(2) 「第2の手紙」

*キーワード：『プロヴァンシアルの手紙』、『恩寵文書』、二つの異端

**関西学院大学社会学部教授

1) LAPORTE, Jean, *La doctrine de la grâce chez Arnauld*, 1922; *La doctrine de Port-Royal*, 1923, 4 vol. MESNARD, Jean, *Pascal*, 1951; *Pascal et Roannez*, 1965. SELLIER, Philippe, *Pascal et Saint Augustin*, 1970. MIEL, Jan, *Pascal and Theology*, 1969.

2) *Ecrits sur la grâce*, Jean Mesnard, *Œuvres complètes de Blaise Pascal*, (Aux Editions de Seuil), 1963. 略号 OCM. 『メナール版 パスカル全集 (白水社) 略号『PM全集』第二巻 望月ゆか訳、『パスカル著作集』略号『P著作集』V, (教文館) 田辺保訳、『パスカル全集』(人文書院) 第2巻 岳野慶作、安井源治訳、参照。

3) PC. p. 4. cf, 『P著作集』III, p. 10.

「第2の手紙」では「十分な恩寵」に関しても、ジェズイットとドミニカンが意見を全く異にしているにもかかわらず、世俗の利益から結びついてることを明らかにしている。モリニスト⁴⁾によれば、「十分な恩寵」は万人に等しく与えられている恩寵であって、自由意志のままになる。すなわち、この恩寵は人々の望むところにより有効にも無効にもなる。この場合、その上、神のいかなる助力も必要でなく、また、神は有効に振舞われて何ら欠けるところがない。...

そして、それ故、彼らはそれを「十分な恩寵」と呼ぶのである。事を行うのにこの恩寵だけで十分だからである。しかし、ジャコバン⁵⁾によれば、「人々は<十分な恩寵>だけで行動することは決してない。人々が行動するためには、実際に彼らの意志を促して行動させる<有効な恩寵>が神から与えられていなければならない。そして、これは誰にでも与えられているわけではない」。このようにジャコバンはジャンセニストと全く同様、「十分な恩寵」を否定している。ジャコバン派は「なんの意味もない言葉を使う点ではジェズイットと同じでも、実は意見は反対で、むしろ内容はジャンセニストと同じことになる」⁶⁾と「第2の手紙」の著者は指摘している。

(3) 「第3の手紙」

「第3の手紙」では、アルノーを異端とするジェズイット側からの譴責には、その根拠が示されていないこと、そして、根拠がなくとも、譴責は少なくとも数カ月間、民衆に対してジャンセニストは異端だという印象を与えるのに有効である点に、ジェズイットの狙いがあることをパスカルは暴いている。

(4) 「第17の手紙」「第18の手紙」

「第17の手紙」はジェズイットを代表する論争家、アンナ神父に宛てており、ポール・ロワイヤルの人々とパスカルを異端とするこの神父に対し

て、「有効な恩寵」、5命題、事実問題、法問題に関し弁明している。また、「第18の手紙」では、アウグスティヌス、トマス、モリナ、カルヴァンの教説を参照しつつ、ジェズイットとジャンセニストの恩寵論を吟味している。

『プロヴァンシアル』では上記5通の手紙が恩寵問題を扱っているが、最初の3通に比べ、後の2通は神学的に内容が充実している。とくに、「第18の手紙」は他の代表的恩寵論と比較しているので、ジャンセニストとジェズイットの恩寵論がかなり明瞭に現れている。従って、ここでは、この「第18の手紙」をとりあげ、パスカルがカルヴァン、モリナ、アウグスティヌスの説を比較しつつ、恩寵論をいかに展開しているかを考察したいと思う。

この「第18の手紙」はアンナ神父に宛てて書かれている。アンナ神父は相手のうちに誤謬を見つけだそうと努め、異端のレッテルを貼った。彼はジャンセニウスの意味が有罪であることを否定したかどで、ポール・ロワイヤルの人々を非難している。そのさい、彼はジャンセニウスの意味が何であるかを説明していない。当時、激しく議論されていたジャンセニウスの意味が何であるかに関して、ポール・ロワイヤルに味方する人々は、そこに認められるものはアウグスティヌスとトマスだけであると言ひ、それに対してジェズイットは異端の意味であると主張するが、その異端の意味が何であるかについては言及していない。「この論争に一言もふれず、説明なしにただジャンセニウスの意味を一般に有罪とするのでは、論争の肝心な点を何ら決定しえないということです」⁷⁾とパスカルは指摘している。そして、ジェズイットが何故、この論争を明確にするのを避けているのか、という点を追及することによって、パスカルはジェズイットの隠れた意図を暴こうとする。

「私はあなたがたが説明もせずこの意味に有罪を宣告させようとされるのには、隠れた理由を持っているからであって、あなたがたの意図はや

4) moliniste. スペインのイエズス会士、MOLINA, Luis (1535-1601) の「神の恩寵と人間の自由意志」に関する教説、モリニズム molinisme を信奉する人々。

5) パリにおけるトミストの別名。ローマでは、ジェズイットの敵であったが、フランスでは宮廷から異端視されるのをおそれてジェズイットと結んだ。

6) PC. p. 22. cf. 『P 著作集』 III, p. 31

7) PC. p. 356. cf. 『P 著作集』 IV, p. 212.

がてこの曖昧な宣告を〈有効な恩寵〉の教えに転じ、これこそジャンセニウスのものにほかならぬことを示すことにあったのだということを明らかにしたのです⁸⁾。すなわち、パスカルは「第17の手紙」のなかで次のように述べている。もしジャンセニウスがこれら5命題において意味するところが、「有効な恩寵」の意味するところと異なるならば、誰も彼らを擁護しはしない。しかし、彼の意味するところがほかならぬ「有効な恩寵」の意味であるならば、彼には何の誤謬もないと。パスカルのこの指摘に対して、アンナ神父は否定せず、次のような区別を設けた。

「ジャンセニウスを弁護するには、彼の主張しているのは〈有効な恩寵〉に過ぎぬと言うだけでは不十分である。何となれば、〈有効な恩寵〉は二つの仕方でも主張されるからである。一つはカルヴァンに従って、恩寵により動かされる意志は恩寵に抗し得ぬと述べる異端的方法であり、他はトミストヤソルボンヌの博士たちに従って、公会議により打ち立てられた原則に基づき、〈有効な恩寵〉自身、意志を支配し、人々をしてつねに恩寵に抗し得るごとくすると述べる正統的方法である⁹⁾と。パスカルは「第18の手紙」においてこの区別に同意し、そして、アンナ神父の次の言葉を利用して反駁している。

「もしもジャンセニウスがトミストたちに従って〈有効な恩寵〉を擁護したのであったら、彼はカトリックであろう。しかし、彼はトミストたちに反し、カルヴァンに従って恩寵に抗する能力を否定するが故に、異端である¹⁰⁾。すなわち、アンナ神父がジャンセニウスの意味と言っているのはカルヴァンの意味にほかならないことにパスカルは注目している。ジャンセニウスの意味がカルヴァンの意味なら、ポールロワイヤルの人々も共に、ジャンセニウスの意味を非難したであろうと彼は言い、しかし、この問題に関しては、ジェズイットは無知であって、アンナ神父は熱情の余

り、ジャンセニウスの教説を知りもせずに、攻撃したと指摘し、その論拠を挙げている。すなわち、ジャンセニストたちは「ただ、人は実際、触発的もしくは無効と呼ばれる力の弱い恩寵に抗し、その鼓吹する善を実現しない旨主張するばかりでなく、さらに彼らは断固としてカルヴァンに反対して、意志が有効にして決定的な恩寵に対してすら抗する能力を有することを主張し、また、同じく断固としてモリナに反対して意志に対する恩寵の力を擁護し、これらの真理を二つながら熱望しているのであります¹¹⁾とパスカルは述べている。

さらに、「彼らは、人間が本性上、つねに罪を犯し恩寵に抗する能力を有すること、そして、墮落後、邪欲の悪い根源を持つに至り、これがためその能力は無限に増大するに至ったこと、しかし、それにもかかわらず、神はその憐れみにより人間の心を動かそうとされる時には、神は人をして神自ら欲するところを、欲する仕方でも、しかも神の謬つことなき行ないによりいささかも人間本来の自由を損なうことなく、行わしめ給うことを知り過ぎるほど知っております¹²⁾と述べている。そして、アウグスティヌスの教説を採用して、「神は、必然性を課することなく、人間の自由意志を支配し、また、自由意志は、ゆえに恩寵に抗し得るものの、必ずしもこれを欲せず、神がその有効な靈感の快味によって引きつけようとする場合には、自由にかつ謬つことなく神のみもとに赴くのであります¹³⁾と述べている。

これこそ、アウグスティヌスとトマス神聖な原則であり、これによれば、「カルヴァンの意見とは反対に、『われわれが恩寵に抗し得る』というのは真理であります¹⁴⁾。しかし、また一方、「教皇クレメンス8世が恩寵問題審議会に宛てた文書のなかで言われている次の事実も真理であります。『聖アウグスティヌスによれば、神はわれわれにおいてわれわれの意志を形成し、彼の至高なる権能が天が下の他のあらゆる被造物に対してと

8) PC. p. 356. cf. 『P 著作集』 IV, pp. 212—213.

9) PC. p. 357. cf. 『P 著作集』 IV, p. 213.

10) PC. p. 357. cf. 『P 著作集』 IV, p. 214.

11) PC. p. 358. cf. 『P 著作集』 IV, p. 215.

12) PC. p. 359. cf. 『P 著作集』 IV, pp. 215—216.

13) PC. pp. 359—360. cf. 『P 著作集』 IV, pp. 216—217.

14) PC. p. 360. cf. 『P 著作集』 IV, p. 217.

同様、人間の意志に対して持つ支配力によって、われわれの心を現実に左右し給う』¹⁵⁾と主張している。このように、パスカルは両極端の二つの誤謬を退けている。この観点から、彼は「ルーテルの背教—『われわれが己の救済にあたって、いかなる意味においても協力せぬことは、無生物に等しい』—も撃破される」とし、また、「われわれをして己の救済に協力せしめる者は、恩寵自身の力であることを認めまいとする、モリニストの背教も撃破される」¹⁶⁾としている。ジャンセニストの主張する、恩寵に抗する能力と恩寵の効力の絶対性は、アウグスティヌス、トマス、彼らに従う神父たち、幾多の会議の教説であるから、ジャンセニストがカルヴァンの誤謬から免れていることは明らかであり、今後、アンナ神父は彼らを異端呼ばわりすべきでない、パスカルは断言しているのである。

2) 『恩寵文書』

パスカルは恩寵と自由意志の問題を専らあつかっている『恩寵文書』¹⁷⁾は、『プロヴァンシアルの手紙』を書いた少し前、「1655年秋から1656年初春」に執筆したと推定されている¹⁸⁾。この文書は『プロヴァンシアルの手紙』よりも体系的に論述されているので、パスカルの恩寵論を知る上で、重要な鍵となるであろう。この文書の中で恩寵に関して当時、問題とされていた点を次のように挙げています。

「神が人間たちの意志を御自身に従わせて、ある人々は救い、ある人々に罰を与えようという絶対的な意志をお持ちになったのか。そして、この御旨に基づいて、選ばれた人の意志を善に、また、永遠の罰を受けることになる人々の意志を悪に傾けることによって、前者の意志を彼らを救おうと

する神の絶対的な意志に、また、後者の意志を彼らを滅ぼそうとする神の絶対的な意志に一致させようとなさったのか。あるいは、神の恩寵をどう用いるかを人間の自由意志に委ねられたうえで、それぞれの人々が恩寵をどのように用いようと欲するかを予知なさったのか。そして、それぞれの意志に応じて、神が一方を救い、一方を断罪しようとする自らの意志を固められたのか。」(「論考二」17)¹⁹⁾と。そして、3つの大きな派、すなわち、カルヴァン派、モリナ派、アウグスティヌス派の恩寵論を次のごとく示している。

(1) カルヴァン派

まず第1に、パスカルはカルヴァン派の恩寵論を次のように述べている。

「神が人間を創造するにあたって、絶対的意志により、何らの功罪も予知せずに、ある人々に罰を与えるために、ある人々は救うために、それぞれの人間を創造されたということ。」(「論考二」19)²⁰⁾もしも人間が神の掟に従うならば、それらの人間を救おうという「条件つき意志」を持っておらず、創造の当初から、救われる人間と救われない人間を区別していた。しかし、神は罪のない者を正義によって罰することができないので、「神がこの絶対的意志を行使するためにアダムに罪を犯させ、彼を墮落するがままになさったばかりでなく、自らその原因となられたということ。」(「論考二」19)²¹⁾つまり、アダムは神の命令によって必然的に罪を犯した。彼は自由意思を失ない、もはや善への傾向をもたず、永遠の死に価する者となった。

アダムの原因はそのすべての子孫に伝わった。「それは、悪しき種子は悪しき実を結ぶといった遺伝的な伝わり方ではなく、神の決定によって伝わったのだということ。その決定によって、すべ

15) PC. p. 360. cf. 『P 著作集』Ⅳ, p. 217.

16) PC. p. 360. cf. 『P 著作集』Ⅳ, p. 217.

17) 望月ゆか訳『恩寵文書』『メナール版 パスカール全集』(略号『MP全集』)第2巻所収、解題、翻訳、注、解説、参照。メナール教授の研究に基づいたきわめて優れた労作であり、また、氏自身による訳注に非常に有用である。

18) OCM. III, p. 591. 『MP全集』第2巻、p. 67.

19) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Lettre* [2] 17, cf. 『MP全集』第2巻、p. 194. OCL. p. 312, 『P 著作集』Ⅴ, p. 141.

20) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 19, cf. 『MP全集』第2巻、p. 195. OCL. p. 312, cf. 『P 著作集』Ⅴ, p. 141.

21) *Ibid.*

ての人間は、生れながらにしてその最初の父祖の罪の科を負う罪人であり、自由意志を持たず、有効な恩寵をもってしても善に傾くことがなく、永遠の死を受けるに値する者であるということ。】（「論考三」27）²²⁾

このようにアダムに罪を犯させた後、神は、「罪の予知以前の未だ無罪の状態の群れのなかから選ばれた人々に救いをお恵みになるために、イエス・キリストが人となられたということ。】（「論考三」28）²³⁾

「この恩寵は、一旦受けたら決して失なわれることがなく、また、さながら石や鋸などの無生物のごとく、意思を善と向かわせる（意思がおのずから善に向かうようにし向けるのではなく、否応なしに善へと向かわせる）ということ。意志には、恩寵と共に働き、これに協力する能力はいささかもない。一なぜなら、自由意思はすでに失われ、完全に死んでしまっているから—ということ。】（「論考三」29）「恩寵が単独で働くということ。そして、その人間が死ぬまで、恩寵が残って、善き業をなし続けるにせよ、それは自由意志が自ら選びとって善き業に向い、善き業を行っているのではないということ。それどころか、恩寵が自由意志のうちに働いてこれらの善き業をなしているあいだも、当人自身は永遠の死に値しているということ。功績をもつのはイエス・キリストのみであり、他のいかなる義人といえども、功績のあるのはイエス・キリストだけであって、義人といえどもいかなる功績も持たず、イエス・キリストの功績が義人たちに着せられ、適用され、かくして、彼らが救われるにすぎないということ。】（「論考三」30）²⁴⁾

ひとたび、この恩寵が与えられた人々は、必ず救われる。ただし、それは、この人々の善き業によるのではなく、イエス・キリストの功績によるのである。「他方、この恩寵が与えられていない

人々には、確実に罰が与えられるが、それは、神の栄光のために彼らを罪へ傾けようという神の命令ないしは決定によって、彼らが犯す罪の故であるということ。】（「論考三」30）²⁵⁾カルヴァンにあつては、人間が善き業をなすのも、悪をなすのも、「神の命令」によるのであり、永遠の救いを得るのも、永遠の死の罰を受けるのも、人間が未だ罪を犯さない以前からの「神の決定」によるのであり、人間の自由意志の介入する余地は全くないと、パスカルは理解している。

（2）モリナ派

次に、パスカルはモリナ派の恩寵論を次のように表現している。「論考二」では、カルヴァン派、モリナ派、アウグスティヌス派と分類されているのに対し、「論考三」では、カルヴァン派、ペラギウス派の残党、アウグスティヌスと分類されて、それぞれの恩寵論が示されているが、「論考三」の「ペラギウス派の残党」とは、「論考二」の「モリナ派」を指していると思われる。なぜなら、「ペラギウス派の残党」では、「論考二」の「モリナ派」の恩寵論に全く依拠しつつ、やや詳細に論じているだけだからである。モリナ派の恩寵論に関しては、人間を墮罪以前と以後に分けて述べている。墮罪以前、つまり、神が人間を創造した時、

「神が人間を正しい者として創造し、これに十分な恩寵をお与えになったということ。この恩寵によって、人間が欲しささえすれば、義のうちにあり続けることもあり続けなくてもできたということ。神が人間を創造するに当って、人間たちがこの恩寵を正しく用いる限り、彼らすべてを救おうという、条件付きの意志をもっておられたということ。この恩寵をどう用いるかはアダムの自由意志に委ねられていたが、アダムが罪を犯し、また、彼において一切の人間の自然本性が罪を犯したのだということ。】（「論考三」18）²⁶⁾

22) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 28, cf. 『MP全集』第2巻、p. 208. OCL. p. 319, cf. 『P著作集』V, pp. 173–174.

23) Cf. 『MP全集』第2巻、p. 208. OCL. p. 312, cf. 『P著作集』V, p. 142, OCL. p. 319, 『P著作集』V, p. 174.

24) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 30, cf. 『MP全集』第2巻、p. 209. OCL. p. 319, cf. 『P著作集』V, p. 174.

25) *Ibid.*, 『MP全集』第2巻、p. 209.

26) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 18, cf. 『MP全集』第2巻、p. 206. OCL. p. 318, cf. 『P著作集』V, p. 171.

墮罪以後の人間に対する神の態度に関しては、次のように言う。すなわち、「もしも神が（腐敗した群にある）すべての人間を守ることをお望みにならず、自らを救う十分な助力を彼らすべてにお与えにならなかったとしたら、神は不正だということになるだろうということ。神が人間を（救われる人々と罰を与えられる人々の）の二つに選別なさったのも、そのように選別されるような何らかの機会を人間たちの側で与えたのでなければ、神が思慮を欠いていたということになるだろうということ。人間に神の恩寵を用いて掟を完全に行わせることを、神が絶対的な意志をもってお望みになるのであれば、彼らの自由意志を損なわずにはおかないであろうということ。」（「論考三」19）²⁷⁾

これらの論拠からペラギウスの残党は次のように主張する。「神は、創造の時と同様に、（腐敗した群れにある）すべての人間を救おうという、一般的で公平で条件付きの意志をお持ちになったが、その条件とは、人間たちが戒めを完全に行おうと欲することだということ。しかし、人間がその罪ゆえに新たな恩寵を必要としたので、イエス・キリストが人となられ、ひとりの例外もなくすべての人間を贖われ、彼らの生涯を通じて絶え間なく〈十分な恩寵〉を恵まれたが、それは、神を信じ、われに助けを与えたまえと神に祈るためにのみ〈十分な恩寵〉であるということ。」（「論考三」20）²⁸⁾この〈十分な恩寵〉を善用する者は、神の憐れみを受けることによって、善き業を行ない、救われるのであるが、この恩寵を活用しない者は罰のうちに留まるのである。「このように、人間が救われるか、罰を与えられるかは、信じて祈るようにとすべての人間に与えられたこの〈十分な恩寵〉を、人間が自分の意志で空しくするか有効にするかにかかっている。」（「論考三」23）²⁹⁾カルヴァン派の説では、救いも滅びも神の意志にかかっているのに反し、ペラギウス派の残党であ

るモリナ派の説では、神から一切の絶対意志を排除し、救いも滅びもすべて人間の自由意志にかかることになる。

(3) アウグスティヌス

最後に、パスカルはアウグスティヌスの恩寵論を、次のごとく墮罪以前と以後に二分して説明する。

「神が罰を与えようという絶対的な意志をもって創造されたはずがない。神はまた、彼らを救おうという絶対的な意志をもって人間たちを創造されたわけでもない。神は、神の戒めに従うすべての者を一般的に救おう条件的な意志をもって、人間たちを創造されたのである。」（「論考三」3）³⁰⁾「神の御手から出たままの、汚れない人間は強く、健やかで正しかったが、それでも神の恩寵なしに神の戒めを守ることはできなかった。神はアダム、その他の汚れない人々に対して、戒めを課するのが正義であるためには、それらを完全に行なうのに必要な恩寵を彼らにお与えしておく必要があった。」（「論考三」4）³¹⁾

すなわち、神はアダムに〈十分な恩寵〉、言い換えれば、神の命令を果たし、正義に留まるために他に何一つ必要としないような恩寵を与えた。この恩寵によって、アダムは堅忍することも、あるいは堅忍しないことも、意のままにできたのである。したがって、人間の自由意志は〈十分な恩寵〉を支配するものとして、意のままに、この恩寵を空しくすることも、有効にすることもできたのである。神はアダムの自由意志がこの恩寵を善用することも、悪用することもできるようにしたのであった。パスカルによれば、墮罪以前の状況に関しては、アウグスティヌスの説は、人間が掟を守るならば、救ってやろうという条件付きの意志を主張しているのが、モリナに一致しているが、カルヴァンは墮罪以前に神は絶対の意志をもって、救われる者と罰せられる者を区別したと主張しているのが、カルヴァンの説とは一致しない。

27) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 19, 『MP全集』第2巻、p. 206. OCL. p. 318, cf. 『P著作集』V, pp. 171-172.

28) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 20, 『MP全集』第2巻、pp. 206-207.

29) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 23, 『MP全集』第2巻、pp. 199-200.

30) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3], 3, Cf. 『MP全集』第2巻、p. 201.

31) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3], 4, cf. 『MP全集』第2巻、pp. 201-202. OCL. p. 317, cf. 『P著作集』V, p. 166.

アダムの墮罪以後、原罪はアダムから彼の子孫に伝わり、

「彼らは、すべて悪しき種子から出る実と同様、はじめから腐敗していた。そこで、アダムから出たすべての人間は、生れながらに邪念のうちにあり、アダムが犯したのと同じ罪を犯す可能性をもち、永遠の死に価する者となったのである。」(論考三 9)³²⁾

彼らの自由意志は墮罪以前のアダムの自由意志と同様、「善にも悪にも傾くことのできるままである。」(論考三10)³³⁾ただ次の点は異なる。すなわち、アダムのこの自由意志が「悪に対していかなる快感も覚え、善を知っているだけで、おのずと善へ向かえたのに、今では自由意志は情慾のゆえに、悪のうちにこよなく甘美な喜びを覚え、悪が自分の善〔幸福〕であるかのように自ら確実に悪に向い、また、悪にこそ至福が感じられるのだというかのように、自ら進んで全く自由に喜び勇んで悪を選ぶということである。」(論考三)³⁴⁾「すべての人間はひとしく、神の怒りと永遠の死を受けけるに価するこの腐敗した群れに属しているので、神は憐れみを与えずに、正義をもって永遠の罰を与えて打ち棄てることもできた。にもかかわらず、神は御心によって、このひとしく腐敗した、咎しか見当たらずに集団から、若干数の人間を選び、選別された。」(論考三11)³⁵⁾つまり、神は取り消されることのできない絶対の意志により、自身の選んだ者を純粹に無償な好意をもって救おうと望み、その他の者たちを彼らの悪しき欲望のうちに打ち棄てておいた。

「神はご自身の選んだ人々を救うために、イエス・キリストをお遣わしになった。これはご自身の正義を果たすためであり、また御自身の憐れみによって、贖いの恩寵、癒しの恩寵であるところのイエス・キリストの恩寵をお恵みになるためであった。聖霊によって心に広がるこの恩寵とはまさしく、神の律法のうちに甘美さと喜びにほかな

らない。この恩寵は、肉の情慾に匹敵するだけでなく、はるかにこれに勝るものである。それゆえ、意志がこの恩寵に満たされると、邪欲によって悪に喜びを抱いていた時よりもはるかに強い喜びを善に対して抱くようになる。こうして、自由意志は、聖霊が吹き込む甘美さと喜びに、罪の魅力以上に惹かれ、自ら確実に神の律法を選ぶ。」(論考三13)³⁶⁾

従って、この恩寵を神から与えられた人々は、最後までこの善き選択をあやまりなく維持することができる。神の律法のうちにより多くの満足を感じるがゆえに、これを破らず、かえって最後まで、自分自身の意志によってこれを全うすることを選ぶ。そこで、彼らは、邪念を征服したこの恩寵の助けにより、また、進んで、かつ自由に選んだこと、および、彼らの自由意志の働きにより、永遠の栄光を得るのである。他方、この恩恵を与えられなかったすべての人々、あるいは最後までこれを与えられない人々は、邪欲によって非常に魅惑され、これに快感を覚えるので、罪を犯さないことよりも、罪を犯すほうをまちがいに好む。アダムの墮罪以後の問題となると、アウグスティヌスの説はモリナ派の説と全く異なる。モリナ派においては、「十分な恩寵」を善用する者は、神の憐れみを受け、善き業を行ない、救いに至るのであるが、「十分な恩寵」を善用するか否かは人間の自由意志の決定に基いている。これに対して、アウグスティヌスの説においては、キリストを通して与えられる恩寵が、人間の意志に満ちる時、邪欲が悪に対して感じさせる以上の喜びを感じるようになり、自由意志は聖霊が引き起こす甘美さと喜びに、罪の魅力以上にひかれ、進んで律法をあやまりなく選ぶようになる。このように、恩寵が自由意志を導き、自由意志がおのずから善の方へ赴くようになるのである。カルヴァン派の場合のように、恩寵が無生物を運ぶように一方的に自由意志を引っ張ってゆくのではないとパスカ

32) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3], 9, cf. 『MP全集』第2巻、p.203. OCL. p.317, cf. 『P著作集』, V, p.168.

33) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 10, cf. 『MP全集』第2巻、p.203.

34) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 10, cf. 『MP全集』第2巻、p.203.

35) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 11, cf. 『MP全集』第2巻、pp.203–204.

36) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [3] 13, cf. 『MP全集』第2巻、pp.204–205. OCL. p.318, cf. 『P著作集』, V, p.169.

ルは言う。

『プロヴァンシアル』において、パスカルは随所に、ジャンセニストたちがカルヴァンのような異端でないことを弁明し、他方モリニズムを厳しく非難している。「彼らは断固としてカルヴァンに反対して、意志が有効にして決定的な恩寵に対してすら抗する能力を有することを主張し、また、同じく断固としてモリナに反対して、意志に対する恩寵の力を擁護し、これらの真理を二つながら熱望している。」また、『恩寵文書』においても、カルヴァン派とモリナ派の説を誤謬として非難し、このそれぞれの派に対するパスカルに態度を明瞭に示している。すなわち、「教会にとって、その最も聖なる真理を打ち倒そうとする相対立する謬説によって、引き裂かれている我が姿を見るのは、実に、辛く、悲しいことだ。しかし、教会はあなたがたモリニストに対しても、あなたがたカルヴァン派に対しても、非難を投げかけて当然であるにもかかわらず、次のことを認める。すなわち、誤りゆえに迷いながらも、なお教会内に留まる者から蒙る損害のほうが、教会から分離し、対抗し、新たな祭壇を設け、母なる教会の呼び戻す声にもはや心動かされず、教会が彼らを断罪する決定下してももはやこれを尊重しようともしない者たちから蒙る損害よりははまだましだということである。」(論考三39)³⁷⁾つまり、モリナ派については、彼らの謬説は教会を悲しませるが、彼らは教会に服従しているのが、まだしも慰めである。ところが、カルヴァン派は謬説を唱える上に、さらに加えて、教会に反逆すると両派を非難しているが、カルヴァン派に対してより厳しい態度をとっている。また、カルヴァン派とモリナ派の「教会にとって慰めは、あなたがた両派の相対立する謬説がかえって教会の真理を確立しているということだ。」(論考三42)³⁸⁾と述べているが、カルヴァン派の自由意志に対する恩寵の優位性、モリナ派の、墮罪以前の状態では「恩寵を善用するか、悪用するかは、人間の自由意志に委ねられていた」という点に一片の真理に見出している。

ジェズイットはジャンセニストやパスカルがカ

ルヴァン派と同様の異端であると激しく非難するのに対して、パスカルはその非難は当たらないと強く反駁しているが、恩寵論に関しては、実際には、カルヴァンの教説とパスカルの思想の間には、かなり親近性が見られる。優れたカルヴァン研究家のフランソワ・ヴァンデルも、アウグスティヌスと同質であるとカルヴァンが感じていたことを指摘しているが、以上見てきた如く、パスカルもアウグスティヌスと同質感をもっている。パスカルがカルヴァンとその後継者たちを断固として退けたのは、パスカルがローマ教会を認めるのに対して、カルヴァンらがローマ教会に真っ向から反対したからであろう。これらの問題に関しては、アウグスティヌスとカルヴァン、及び、アウグスティヌスとパスカルの関係を別稿において論じなければならぬ。ともあれ、「聖アウグスティヌスの弟子たちは、聖書、教父、教皇、公会議、つまり、教会の変わることをない伝承に則って、すべての人間に真理を知らすべく、神に涙し、人間に心を砕く。」(論考二38)³⁹⁾と述べて、パスカルはアウグスティヌスとその弟子たちの説に全く同意している。墮罪以前、「神はアダムの自由意志がこの恩寵を善用することも悪用することもできるようにした。」墮罪以後、キリストの恩寵が「人間の意志に満ちると、邪悪が悪に対して感じさせる以上の愉楽を、善に対して感じるようになる。かくして、自由意志は聖霊の引き起こす甘美さと悦びに、罪の魅力以上にひかれ、進んで神の律法をあやまりなく選ぶようになる。」墮罪以後、カルヴァンやモリナの場合の如く、恩寵、あるいは、自由意志が他を無視して一方的に働くのではなく、パスカルの場合はアウグスティヌスの如く、恩寵と自由意志が内的に触れ合い、恩寵が意志を満たすことによって、内的に触発された自由意志が進んで善を選ぶようになるというのである。このように、宗教思想の根幹をなす恩寵論がアウグスティヌスと同質であることをパスカルは明確に表明している。

37) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 39, cf. 『MP全集』第2巻、p. 199.

38) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 42, cf. 『MP全集』第2巻、p. 200.

39) OCM. III, *Écrit sur la Grâce, Traité* [2] 2, Cf. 『MP全集』第2巻、p. 199.

主要参考文献

- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656* - Roma, ARCHIVUM ROMANUM, SOCIETATIS IESU, 6 feuilles (6 pages)
Pascal (Blaises), *LETTRE A VN PROVINCIAL, Edition princeps*, 1656—1657.
- *Les Provinciales*, Cologne, 1657 (398—111 p.)
- *Les Provinciales*, Cologne, 1657 (396—108 p.)
- *Œuvres complètes*, Paris, Hachette, (Grands Ecrivains), éd. Brunshvicg, 1904—1914, 14 vol. in-8°. (略号 *GE*. ローマ数字は巻数を表す。)
- *Œuvres complètes de Blaise Pascal*, (Aux Editions de Seuil), 1963. (略号 *OCL*.)
- *Œuvres complètes de Blaise Pascal*, I—IV, éd. de Bibliothèque Européenne, 1964—1992. (略号 *OCM*.)
- *Les Provinciales*, Paris, Garnier, éd. L. Cognet, 1954, 503 p. in-8°. (略号 *PC*.)
- 『パスカル全集』第2巻、(人文書院)第2巻 岳野慶作、安井源治訳
- 『パスカル著作集』Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ, (教文館) 田辺保訳、1980—1983, (『P 著作集』)
- 『メナール版 パスカル全集 (白水社) 第二巻 望月ゆか訳、1994, (『MP 著作集』)
- *Réponses aux “Lettres Provinciales” publiées par le secrétaire de Port-Royal contre les PP. de la Compagnie de Jésus*. 『イエズス会の神父に対して反論して、ポール・ロワイヤルの書記が出した「プロヴァンシアルの手紙」に対する回答』(Par de PP. Jacques Nouet, François Annat, de Lingendes et J. Brisacier) Liège, 1656. Bibliothèque Nationale (Cité : BN) [D. 12353.]
- *La Bonne Foi des Jansénistes en la citation des auteurs, reconnues dans les lettres que le Secrétaire du Port-Royal a fait courir depuis Pasques*, (『復活節以来、ポール・ロワイヤルの書記が流布させたなかに見られる諸作家引用のさいの、ジャンセニストの不誠実』) Par le P. Annat, de la Compagnie de Jésus. A Paris,. 1656. BN. [D. 4406.]
- *Apologie pour les casuistes contre les calomnies des Jansénistes. ...par un théologien*. (『ジャンセニストの中傷に対する、ある神学者による良心例学弁護論』)
- R. P. Rapin, *Mémoires*, t. II.
- NIESEL, Wilhelm, *Die Theologie Calvins*, München, 1957.
- WENDEL, François, *Calvin, source et évolution de sa pensée religieuse*, PUF, 1950.
- SMITS, Luchsius, *Saint Augustin dans l'œuvre de Jean Calvin*,
- LAPORTE, Jean, *La doctrine de la grâce chez Arnauld*, 1922;
- *La doctrine de Port-Royal*, 1923, 4 vols.
- MESNARD, Jean, *Pascal*, 1951;
- *Pascal et Roannez*, 1965.
- SELLIER, Philippe, *Pascal et Saint Augustin*, 1970.
- MIEL, Jan, *Pascal and Theology*, 1969.
- 森川 甫『フランス・プロテスタント苦難と栄光の歩み—ユグノー戦争、ナント勅令、荒野の教会—』改革派教会西部中会文書委員会、1999,
- MORIKAWA, Hajime, *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656*—パスカルの『プロヴァンシアルの手紙に関連して—』「社会学部紀要」第63号 関西学院大学 1991.
- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656, —concernant Les Lettres Provinciales de Blaise Pascal—*, Etudes de Langue et Litterature Françaises, N° 60, 1992
- *Annuaire Litteraire Provinciale Franciae Ad annum Christi 1656* とパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』『ガリア』XXXI, 大阪大学フランス語フランス文学会 1992.
- *LES LETTRES PROVINCIALES DE BLAISE PASCAL ET ANNUÆ LITTERÆ PROVINCIÆ FRANCÆ AD ANNUM CHRISTI 1656*, Kwanssei Gakuin Annual Studies, Vol. XLIII, 1994.
- ARNAULD, Antoine, *De la Fréquente Communion ou les Sentiments des Pères, des Papes ... AUGUSTIN (saint), Œuvres complètes de saint Augustin*, traduites en français et annotées par MM. Péronne..., Paris, 34 vols.
- COGNET, abbé Louis, *Les origines de la spiritualité française au XVIIe siècle*, 1948, *La Mère Angélique et son temps*, 2 vols, 1950 et 1952,
- *Le Jansénisme*, 1964,

Development of Pascal's Doctrine on Grace of God.

ABSTRACT

Blaise Pascal wrote on the grace of God and human free will in *Les Lettres Provinciales*, composed of 18 letters, from January 1656 to March 1657. He treated this subject in the first step: 1st to 3rd Letters, and the second step: 17th and 18th Letters. He presents three important doctrines of this subject, that is, the doctrine of Molina, that of Calvin and that of Saint Augustine. Molina insisted on the predominance of human free will, but Calvin denied it and emphasized that salvation of the human beings depends on only God's grace. Pascal rejects those two doctrines as heresy. He agreed with Saint Augustine's doctrine, that is, the predominance of God's grace, which drives human free will to the good or the bad; the work of human free will is not dead.

In writing this subject, Pascal has made better progress in the second step (17th and 18th Letters) than the first step (1st to 3rd Letters).

Key words: Pascal, St. Augustine, grace.